

こ と ひ ら や ま こ ふ ん  
**琴平山古墳** 現地説明会資料

**名張市赤目町檀字横山所在**



せんどう  
羨道部作業風景



げんしつ  
玄室部（奥壁）・中には入れません

**名張市教育委員会**

## 琴平山古墳の調査

### 琴平山古墳の概要

名張市南部、赤目地区の丘陵に所在する前方後円墳。宅地造成に伴い範囲確認調査を実施。全長約70m、後円径36mを測る。後円部には、立石で閉塞した横穴式石室が、くびれ部と前方部にも埋没した石室がある。墳丘は三段築成で、それぞれ円筒埴輪列や葺石ふきいしが見られる。前方部端の主軸線上に、人物埴輪を含む埴輪列の方形区画が張り出す。南側のくびれ部露岩下の斜面には多量の須恵器すえきが堆積しており、堆積の最下層には、杯身つみみ、杯蓋つみぎたを5～6枚重ねたものが5～6セット並べられ、斜面上位に高杯たかつきや壺つぼ、器台きだい、大甕おおがめなどが置かれていたようだ。この須恵器の時期は、陶邑すえむら TK10の6世紀前半で、埋葬後の墓前祭に使われたものであろう。この堆積の上層から陶質土器の把手付鉢とってつみはちが出土しており、くびれ部の石室より掃き出された、5世紀代に比定される土器である。古墳の築造は、埴輪から6世紀初頭から前半にかけてと考えられ、前方後円墳としては名張郡内初現かつ最大である。東隣にある丸尾山山頂の、円墳で横穴式石室の丸尾山古墳まるおやまこふんとともに、前方後円墳と横穴式石室の採用という、郡内集団統合の一つの画期を垣間見ることができる。

横穴式石室を埋葬施設とする前方後円墳は、名張市北部の国史跡美旗古墳群みはたこふんぐんの貴人塚古墳つかこふんと、名張市南部の鹿高神社古墳かたかしんじやこふんと春日宮山古墳かすがみやまこふんがある。名張市南部の前方後円墳は、ともに2基の横穴式石室を造るもので、市の史跡に指定されている。

### 調査ならびに保存に至る経過

調査地は、金比羅社の祠があることから「琴平山」と呼ばれている。平成4(1992)年、宅地造成の計画により範囲確認試掘調査を実施し、琴平山古墳は現状保存されることとなった。その後、住宅会社が破産し住宅計画が取り下げられ、保存計画は白紙となった。その後、産業廃棄物の処理場や資材置き場等の開発の噂がのぼるなかで所有権移転が繰り返された。開発当初の文化財保護策が後退にならないよう、なおかつ現状保存ならびに活用を図るため、平成17年9月6日に地権者の同意を得て市指定文化財に、さらに翌平成18年3月17日には県指定文化財の史跡に指定された。

後円部の石室については、昭和30年代には盗掘坑が開いており、石室内で遊んだり石室内より鉄板を持ち出してメンコで遊んだとの話があり、石室が埋まらずに、空間として残っていると想定された。名張郡の首長像を知るうえで、また積極的な保存活用策を講じるため、18年の10月下旬より後円部の横穴式石室の規模構造を解明する学術調査に着手した。

## 調査の結果

まず、後円部石室の盗掘坑から掘削し<sup>げんしつ</sup>玄室内に侵入したところ、奥から入口を見て左側の側壁が大きく崩壊していた。崩壊時期は、その後の<sup>せんどう</sup>羨道部の調査から、玄室内にあまり土砂が堆積しない築造後まもなくの崩落であることが推定できる。玄室の奥壁の幅は約2.4m、玄室長は約4.5mである。奥から入口を見て右側に<sup>そで</sup>袖を造る。羨道部は幅1.2m、長さは5mである。伊賀地域最大級といわれる美旗古墳群の赤井塚古墳の横穴式石室は、奥壁幅2.4m、玄室長5.7mであり、それよりより正方形に近い形である事が分かる。使用される石材は、基底部に近いほど薄い板石が使われ、上に行くにしたがってやや大振りの板石が使われる。これは、持ち送りという、上に行くにしたがって狭めて積み上げて天井石を小さくする工法由縁である。

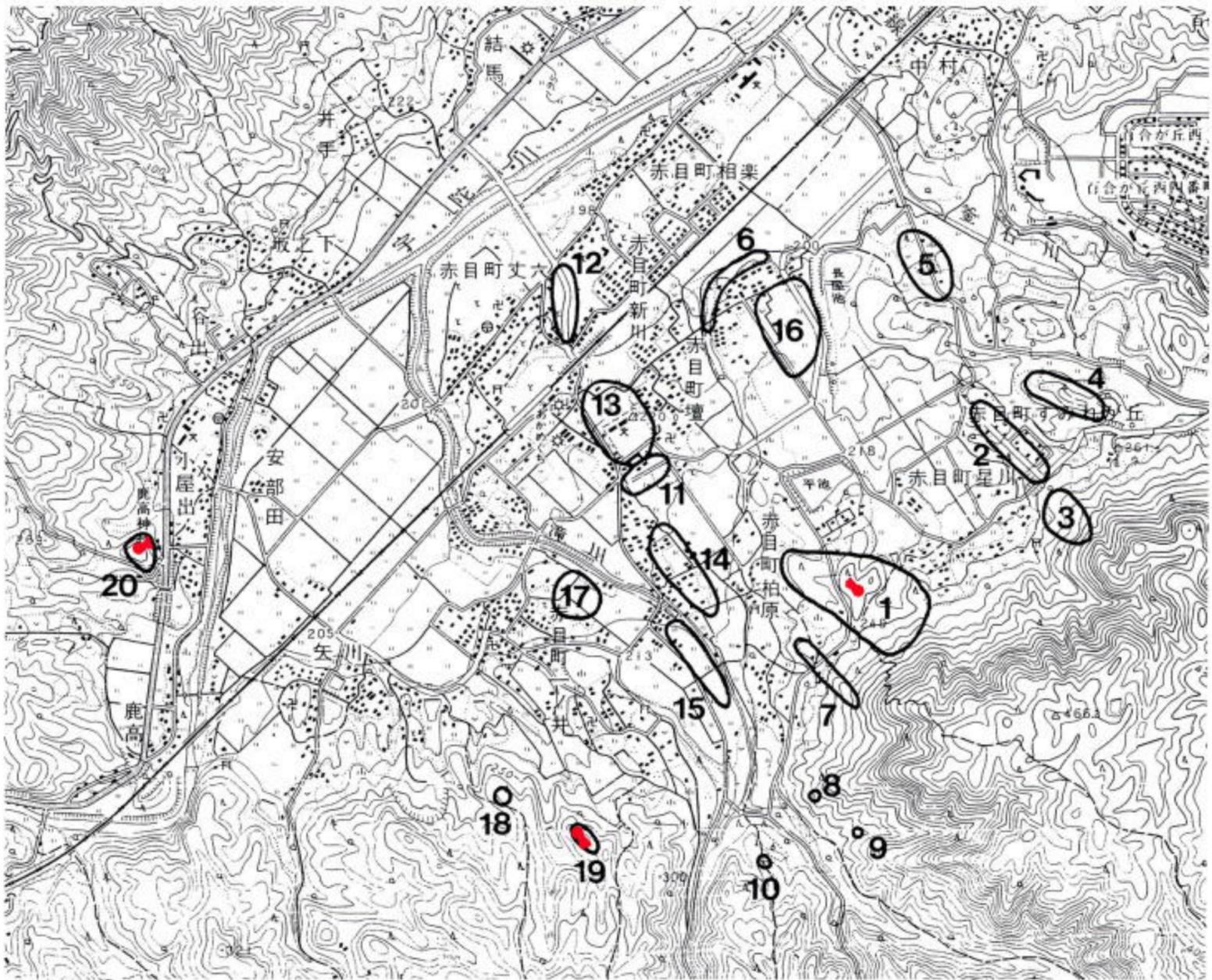
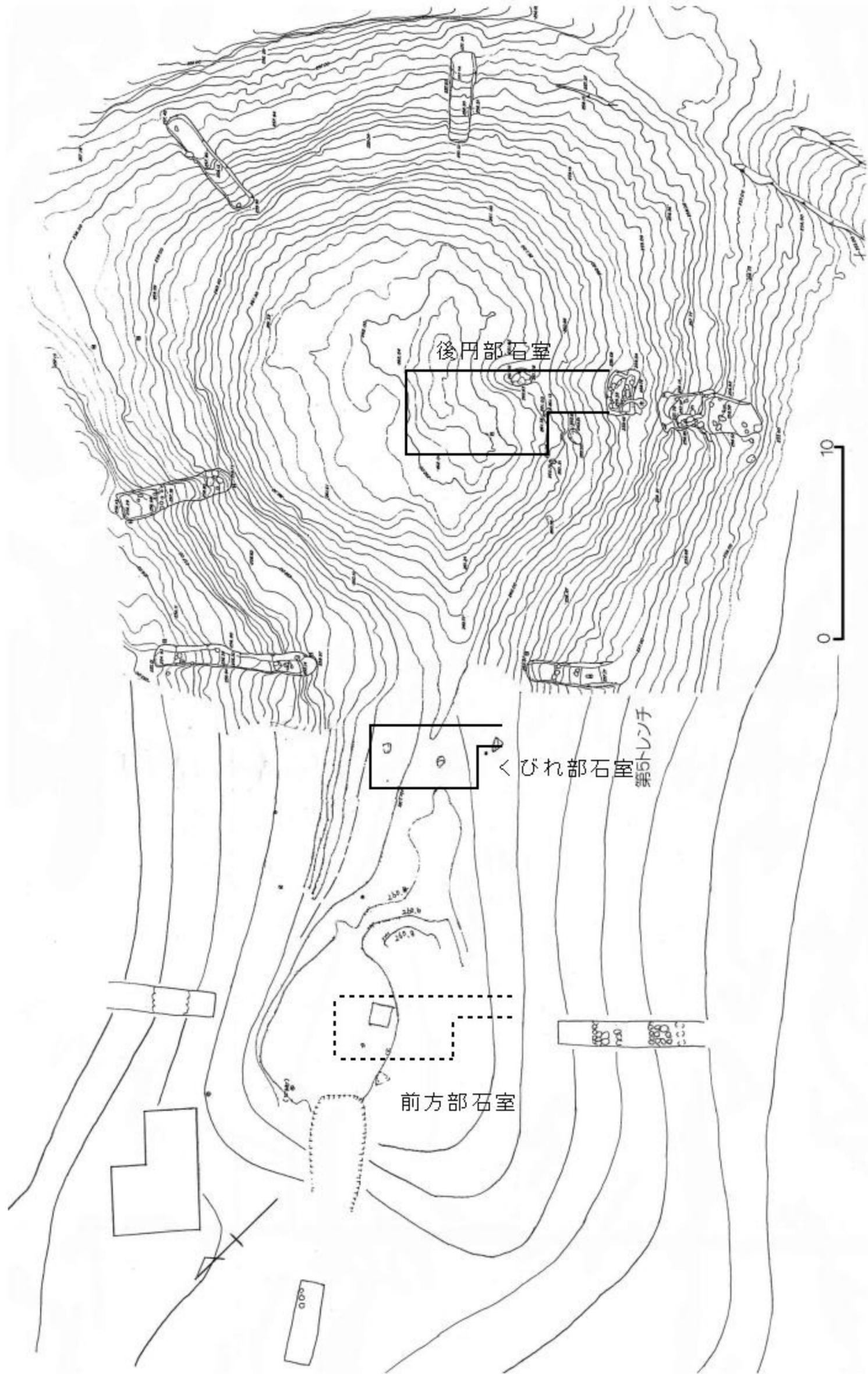


図1. 周辺の遺跡(1:25,000)

- 1.横山古墳群・丸尾山古墳群・石取場古墳群 2.尻矢古墳群 3.杉矢谷古墳群 4.根冷古墳群  
 5.二ツ塚古墳群 6.小場古墳群 7.天神森古墳群 8.木戸口古墳 9.滝谷古墳  
 10.台ヶ芝古墳 11.大垣内古墳 12.沢代遺跡 13.赤目檀遺跡 14.垣添遺跡 15.上東野遺跡  
 16.坂之上遺跡 17.辻垣内古墳群 18.桃山古墳 19.宮山古墳 20.鹿高神社境内古墳  
 1. 琴平山古墳



琴平山古墳 墳丘略測図(1:300)

## くびれ部の石室の調査

後円部の石室は、玄室内が側壁の崩落により玄室内を掘削する事ができなかったため、くびれ部の石室の調査を開始した。結果、露出する石材は石室の天井石で、小振りの石材を用いた持ち送りの強い石室である事、ならびに埋没している事が分かった。奥壁の一部と右袖の石材を確認したが、崩落した天井石や側壁により、石室内を掘削する事はできなかった。石室寸法は、玄室は後円部石室と同じく幅2m強、長さは4.5mの右片袖で、羨道は短く幅1.1m程、長さも2m程である。規模の確認のみで、掘削作業は中止した。

後円部石室と比べ、羨道が短く、天井石も小さい。

## 前方部の羨道の調査

後円部石室の全容を解明するため、羨道部の掘削を開始した。羨門部は板石で閉塞<sup>へいそく</sup>されているが、横の天井石は棒状の川原石で取り去る事が容易であったため、この天井石を移動し、そこより羨道に入る事とした。板石より奥へ1.4mの間には、壁材と同じこの周辺で産出する溶結凝灰岩<sup>ようけつぎょうかいがん</sup>の板石の端材が閉塞石として積まれていた。

通常、羨道部の高さとして1.5m以上が想定されたため、遺物が出土しない1.2m程を目安に掘削をしていたところ、玄門付近で<sup>げんもん</sup>甕と<sup>かぶと</sup>剣ならびに<sup>けん</sup>直刀<sup>ちよくとう</sup>が出土した。玄門付近での床面は、天井石まで1.35mとかなり低い。玄門の天井石から玄室の天井石までも同じく1.35mである。側壁の石積みは、玄室の側壁と同じく薄い板石を用いた<sup>せん</sup>磚<sup>せん</sup>積み様の積み方である。

なお、玄門部での遺物の出土は、崩落した壁石の直下から見つかる事から、埋葬時に近い時期に壁が崩落したと考えられる。したがって、玄室の崩落した石の下には、埋葬時の姿がそのまま残っている、いわゆる未盗掘の状態であろう。



琴平山古墳・後円部横穴式石室 模式平面図

## 出土遺物

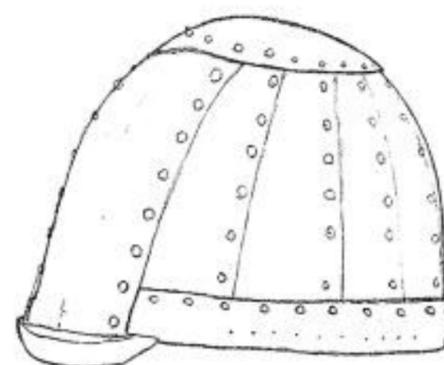
冑（衝角付冑＝しょうかくつきかぶと）

この冑は、豎矧鉾留（たてはぎびょうどめ）で造られている。直径22cm前後、高さ17cmを測る。5世紀代の冑は、横板を使う横矧（よこはぎ）であったのが、6世紀には、3つの部材（腰巻きに使う細長い鉄板・胴に使う縦型の台形板状の鉄板・天井に貼りつけるお椀状の鉄板）で造れる豎矧に進化し、大量生産への道が開ける。しかし、古墳への冑の副葬という風習がすたれ、出土品は畿内周辺では十数例を数えるのみである。



剣（けん） 全長70cm

両刃の剣で、木製の鞘（さや）の一部が残っていた。鞘の表面には漆が残り、その上に赤色顔料（水銀朱）塗られていた。いわゆる「赤鞘」である。



剣の近くに長さ1cmほどの銅芯に金メッキを施した、いわゆる金銅製の鉾留めをした薄板があり、鞘の装飾の可能性はある。

豎矧鉾留衝角付冑の模式図

たてはぎびょうどめしょうかくつきかぶと

直刀（ちよくとう） 全長128cm

長大な直刀である。実用ではなく、儀仗用の刀であろう。市内で見つかった直刀のなかでは最長である。



## 小結

今回の調査で琴平山古墳の石室が、朝鮮半島の百済の影響下に成立したとされる、畿内形横穴式石室であること、その中でも天井石までの全体像がつかめる初現期の石室である事が分かった。一方の側壁が崩落しているにもかかわらず、全体像を見る事のできる希有の例である。その中で、羨道部分の天井が低い事や、玄室から見た玄門部の石積みの特異（通常は、羨道の天井石が見上げの大石として使われ、1～2枚の石の壁に見えるところを、側壁と同じように板石を積み上げた磚積み＝レンガ積みのように造られている。）な事など、類例調査により新事実がでるかも知れない。

また、羨道部での冑の出土は類例が無く、冑が当時としては豎矧という最新式である事、また、赤鞘の剣や長大な直刀など武器のみの副葬は、畿内勢力の拡張に伴う、組織として軍事部門を担う武人の姿が彷彿される。